

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】相澤 里沙

【所属】(助成決定時)

東北大学大学院文学研究科

【研究題目】

蘭領東インドにおける学知の形成—インドネシアの「アニミズム」と「アダット」—

【研究の目的】

本研究の目的は、1920～1950年代のオランダ民族学における学知の形成過程を検討することで、インドネシアの「宗教」をめぐる問題の考察と国際理解の促進を目的としている。インドネシアは宗教が大きな位置を占める国家である。国家五原則「パンチャシラ」には「唯一なる神への信仰」が定められ、国民は国家の定める公認宗教のいずれかに属さなくてはならない。宗教に属していないものはスハルト体制化で非合法化された共産主義との関わりを連想されることもある。独立後インドネシアにおける「宗教」および「文化」概念は、植民地時代の宗教学や人類学が提示した枠組みの影響を受けながら、現地人知識人によるその受容と再統合のなかで展開されてきた。したがって現代インドネシアの「宗教」と「文化」を考えるさい、オランダによる研究蓄積を検討することは意義あることである。本研究では、現代インドネシアにおいて「宗教」の領域外にある諸概念「アニミズム」と「アダット」に注目する。オランダ民族学においてそれらの概念がいかに形成されたかを精査し、「宗教」概念の再検討を行う。

【研究の内容・方法】

1920～1950年代のオランダ民族学における宗教をめぐる学知の形成過程を明らかにするために、以下の2点から研究を行った。すなわち①ライデン学派における「アダット」研究史の整理、②G・J・ヘルト(G. J. Held、インドネシア大学民族学講座教授)と、ライデン学派の確立者でヘルトの師であるJ・P・B・デ・ヨセリン・デ・ヨング(J. P. B. de Jossellin de Jong、ライデン大学民族学講座教授)の宗教に関する理論の分析である。

①に関しては、オランダの「アダット」研究における二つの流れを、それぞれ先行研究から整理した。二つの流れとはC・ファン・フォレンホーフェン(C. van Vollenhoven、ライデン大学法学部教授)から始まる慣習法学派(法学)と、J・P・B・デ・ヨセリン・デ・ヨングのライデン学派(民族学)である。彼らに関する先行研究を整理し、オランダにおける「アダット」研究を概観した。

②に関しては、オランダの諸研究機関において、ヘルトとデ・ヨングの著作と関連資料の収集を行った。〔2011年3月6日～19日、王立言語・地理・民族学研究所(略称KITLV、在ライデン)、ライデン大学図書館(在ライデン)、オランダ聖書協会(在ハーレム)〕。KITLVにはヘルトの特別コレクションが収蔵されており、ヘルトとデ・ヨングの未刊行書類と往復書簡を収集することができた。オランダ聖書協会では、ヘルトが聖書協会に提出した報告書を閲覧することができた。収集した資料を、ヘルトとデ・ヨングの知的交流に注目しながら精読し、彼らがインドネシアの宗教についていかなる記述をしていたか、どのような過程を経て宗教をめぐる学知が形成されたかを分析した。「アニミズム」と「アダット」のほかに、ヘルトはとりわけ「呪術」に関心をもっていたことが明らかになったため、「呪術」概念も考察の対象とした。それらは「宗教」とは異なるものとされていることから、それらの分析を通して、彼らの「宗教」に対する見解について考察を行うことができた。

【結論・考察】

1920～50年代のオランダ民族学は先行研究の批判から発展した。「アニミズム」や「アダット」等の概念は、デ・ヨングとヘルトによって批判的に再検討されたのだった。またヘルトは「呪術」の問題にも大きな関心を寄せていた。彼はインドネシアでの経験をもとに「アニミズム」等の学説を再検討しながら、「呪術」概念の再考を試みたのだった。書簡と諸著作からは、ヘルトがデ・ヨングから強い影響を受けたことが指摘できる。ヘルトは宗教と「宗教と関係ないもの」という対立を作り、後者に関係するものを「呪術」とした。それは独立後インドネシアにおける「宗教」と非「宗教」の弁別との類似が指摘できる。しかし異なる点はヘルトが両者を関連させ、かつ呪術の社会的意義を評価するという点である。国家統合が進められ、「宗教」が定義づけられていくインドネシアにおいて、ヘルトは「宗教」の枠内に収まらないものにも価値を見出していたといえるだろう。